

目次

現うつつぐるま車 前篇（序章～第八章） 1

福島次郎略歴 340

序 章

私の父と、私の姉の父とが、別の人だと、伯母から打明
けられたのは、私が十六のときであった。

「嘘ばかり！」

ムキになって言葉をかえした。しばらくは信じなかった。

「何を嘘云おうかい。どうせいつかは知らんこと。早う
知ったがよか。姉ちゃんのおとつあんは総平さんちゅう
てね、自動車の運転手だった。姉ちゃんはこのあいだも、
おっかさんに、自分のおやじの墓どころば聞きよらしたが
ね」

これを聞いて、唯でさえ濃くなかった姉弟の意識が、更
に薄く遠いものに感じられるようになった……。

私の父が、又弟の父親とも違うのだと、母から直接聞か
されたのは、私が二十のときであった。

当時、私は、幼時から私の乳母代りになって呉^くれてい
た伯母と二人で、山崎町^{やまざきまち}に住んでいて、唯朝夕のめしだけ
を、栄通りの母の家に食べに行っていた。

細い春雨が白銀色にけぶって降る日だった。

朝食をすまして出てくると、あとから母が小走りで追っ
て来た。背の低い、肥った体を前こごみにして路地を駆け
て来て、

「あたしも、ちょっとそこまで用のあるけん、一緒に行
こ」

と云って、私のこうもりへ入った。

黒く濡れて光るアスファルトをふんで、二人は花畑公園
前の電車通りの方へ、しばらく歩いた。

「ね、泰三。信正にや決して云うちゃんらんばい」

母がふとこう改まった口調で云った。

私は「なんばな？」と問い返しながらも、心中とつさに
(弟の信正に黙って母が私にだけ新しい服でも作ってくれ
るのかな)と思った。「うん、決して云わん」私は軽く頷
いてみせた。が、次に云われた母の言葉は妙なものだった。
「今から、あんたのおとつあんのところへ連れていく」
「おとつあんのところて？ ああの裏小路の家だろたい？」

俺は知っとる」

「裏小路の家は……ね……あれは、信正のおとつあん」

「……」

「あんたがおとつあんはちがうと」

「……」

「あんたの本当のおとつあんの家さん、今から連れて行くけん来なはり」

母は、私の顔を見ずに、わざとしがめた無表情さで、ぶつさら棒に云った。

意外だった。急に思考が止まったようで、しばらくからつぽな頭のままの感じで、傘を母にさしかけて歩いていった。私が黙っているのかぶせて、母がやや焦ったような低声の早口で、又云った。

「あんたがこの頃、俺は脳のどぎゃんかある、グジャグジャする、おとつあんがアルコール中毒だったけん、そのせいじゃなからうか、てち心配するけん云うてしまうとばってん、あんたのおとつあんはね、あの途中で死なした信一郎さんじゃなかと。北署の刑事だったと。……この事は今迄誰にも云わんで来たばってん」

電車通りへ出た。なま暖い小雨の中を、二人はチョコレート色の貯金局の前まで歩き、そこで電車を待った。子飼

橋行きの電車が来た。母にうながされてそれに乗った。

電車の中に立ち、つり革をにぎってゆられていながら次第と事のなんたるかがわかり出して来た。

私の脳裏にはりつめていた氷がこわれて、解けはじめ何やらわかりかけ……その底のものがようやくわかり出して……とうとうはつきりわかってしまうと……ふしぎにホツとした気持だった。

そのころの私の胸中には、家を呪う気持^キが強くあった。爛れた、収拾のつかない、乱脈な家の中——私は家というものに絶望していた。そのやくざな家の中で、私が血を享けたという父が、別の世界の人——刑事とかいう堅い職の——あたりまえの人間——であつた事がわかつて、ホツとしたのだった。

ことに、やくざものの弟と、せめて父なりとも違つていた事が、一つの救いとなつて、電車のつり革をにぎつてゆられている私の胸に沁みわたつてゆく……。

私と並んで立っている母の頭は、私の肩のところ迄しかなかつた。その肩のところを、私を仰ぐようにして「たまがつたろうね。たまがつたろうね」と、面映^{おもはゆ}そうなほろ苦い微笑をふくんで、呟いていた。

しかし、この告白は、数年前、伯母がもらした「姉の父」の件よりも、私をゆすぶらなかつた。

姉が異父兄弟と知った時、頭の中が急にねじれてゆがんだようになったが、この時は逆に、ねじれていたものが元にもどったような、安心した気持だった。

(ふーん。そうだったのか。それもよかる)

藤崎宮前で電車を下りた。

宮の正門から、電車通り添いに北へ五十米ほど歩いたところに、私の実父の生家があった。しかし、父はそこにはいなかった。父はもうこの世にはいなかったのだ。私が母の胎内にある頃、父は母とも関係ない場所で、関係なく死んでいた……。

歩道に青桐が繁って、店口の汚れたガラス戸に、木影を一ぱいうつしていた。母がガラス戸を開けた。中の土間は暗かった。

木材商兼古道具屋であって、埃をかぶった重箱、膳、額、花びん、椅子等が、乱雑に積みかさねてあり、又土間には、床の置物の材料らしい、ねじれた木の根の塊りがいくつか放り出されてあった。

「こんにちは」

母の大声で、奥から五十位のあから顔の肥えた人が出て来た。簡単な挨拶ののち、母が「泰三ば連れて来ました」と云うと、先程から私をちらちら盗み見していたその人は、

今度はそのむくんだ瞼の下の細い眼を私へ真向うに向けてしばたたき、「ほう、来たばいね」と云った。

この時、私は、この人の顔がどこか自分の顔に似ている——少くとも自分と同じ系統の顔だ——と直観的に思った。

ついさきほど迄は、(お前の伯父さんは?)と問われたなら、すぐにあの、私を小さい時から可愛がって呉れて来た裏小路の田上の伯父の浅黒い丸顔を習慣的に思いうかべるに違いない。ところが今は全く面影のちがう、大柄で四角な顔の伯父をみせつけられているのである。

母と私とは、真暗な長い土間を抜けて、奥の座敷へ通された。そこも暗かったが、唯天井に明り窓があつて、そこから灰色の太陽のこぼれびが、畳の中央の部分にほんやりさしていた。気味の悪い座敷だった。床の間には、在りし日の父の半身像の写真が額にはまって飾ってあった。額は大きくがっしりとしたものだったが、昔のままらしく、すでに古びくすんで、ところどころ上塗りが剥げ落ちていた。この日、私を連れていくという事は、母から伯父に知らせてあったらしい。私達に御馳走がしてあった。写真には、丁度二、三日前に死去した人のように両側に灯明^{とうみやう}をともし、新しい華をもち、菓子と酒の供養物を供えてあった。その向うから、二十余年前の父が眼を細めて私をみている——初めてみる父の面影——胸の裏がわを、ふしぎな感触の羽

根でくすぐられる思いだった。

大きないがぐり頭、怒ったような太い眉、角張った顎、一文字に結んだ薄い唇——が、写真はあまりに無表情だった。

私が来た事を、伯父は心からよろこんでいるふうであった。この人は、独身のまま夭逝ようせいしてしまった自分の弟に、このような「おとし種」があるうとは夢にも知らなかったらしい。しかも、相手が人妻であった私の母であろうなどとは。

知ったのはつい最近らしい。母が打明けたのだ。しかし、たとえそれが不義のもとに行われたものであったにせよ、唯一人の弟の、生なまの忘れ形見を眼の前に見る事は悪い気持ではなかったのだろう。

私は昔の父の写真帖をみせて貰った。それはもうみな黄褐色に変っている古いものばかりだった。すべて二十代の写真なので父という感じがピンとこない。鳥打帽に和服。ソフトに背広。中でも柔道着をきて写っているのが最も多かった。そして、その大抵のものが、手を拱こまねきむつりとしていた。

奇妙な気持で私が写真帖をのぞいている傍にあつて、母と伯父は、昔を懐しむ話をしきりにやっていた。

塩屋町しおやまちの定期場でバクチをやっていた頃の事。祖父や母

に、この伯父と私の父の「瀬戸兄弟」が非常に世話になった事。その時分いたらしい女や男の人の名前も出てきた。定期場が華やかだった頃から、母も伯父も互に知っている同志らしく、話の調子も打とけて、闊達かつたつに語り合っていた。「民江さん。ああなたはあの頃は、飛ぶ鳥も落す勢だったかなあ」

「そりゃ、アレばしよったけんな」

「あのバクチばわっしがすると、うちの潤次がむごう嫌いよつたが、おもしろえもんな、本家のああたと……な……ばつてん、早かもんじゃあるなあ。もう潤次が死んでから何年になるかい。二十う……う……と……なん年かい。とにかく二むかしたい。そんなら潤次がいくつの時の子になるんか？」

「二十六の時だろか」

「そやんたいなあ……あれが柔道で胸打って死んだとが昭和五年の十一月だったけん……」

「時々でておいで」としきりに云う伯父に挨拶して、私はその家を辞した。

雨はなお降りしきっていた。電車に乗った。母はシートに腰を下ろしたが、私は立つて窓にもたれた。顔を近々と寄せている窓ガラスに、雨粒があたり、それがくずれて幾

福島次郎略歴

一九三〇年、熊本市生まれ。

一九五三年、東洋大学国文科卒業後、八代工業高校に赴任、その後、国語教師として熊本県内の公立高校に勤務。

一九五七年、「阿武隈の霜」で第八回九州文学賞受賞。

一九六一年、「現車」(日本談義社)で第三回熊日文学賞受賞。

一九六四年、「現車」を『日本談義』(日本談義社)二月号より、

六六年十二月号まで連載(三十三回)

一九八七年、教職を退く。以後、執筆活動に専念。

一九九六年、「バスタオル」を『詩と眞實』二月号に発表、

『文學界』六月号に転載。第一一五回芥川賞候補になる。

同作品で第二五回詩と眞實賞受賞。

一九九八年、三島由紀夫とのかかわりを描いた小説『三島由紀

夫——剣と寒紅』(文藝春秋)刊行。三島の未公開の手紙

を無断掲載したとする遺族の提訴で出版差し止めとなる。

一九九八年、「蝶のかたみ」を『文學界』十一月号に発表。第

一二〇回芥川賞候補になる。『蝶のかたみ』(文藝春秋)

刊行。

一九九九年、「奇腹讀」を『詩と眞實』六月号に、「華燭」を

『文學界』七月号に発表。

二〇〇〇年、「霜月紅」を『文學界』三月号に発表。

二〇〇一年、「淫月」を『文學界』九月号に発表。

二〇〇三年、「缶爛酒」を『詩と眞實』八月号に発表。九月より自伝的小説「いつまで草」を『熊本日日新聞』に連載

(二〇〇五年一月まで、四〇八回)

二〇〇四年、「三島由紀夫の心、その深奥——全書簡を読む」

を『文學界』五月号に発表。

二〇〇五年、「花ものがたり」(熊本市現代美術館)、『淫月』

(宝島社)刊行。四月より「花のかおり」を『熊本日日新

聞』に連載(四五回)

二〇〇六年二月二二日、死去。享年七六。

二〇〇六年八月、『華燭』(海鳥社)刊行。

うつつくるま
現 車 前篇

2017年4月20日 初版第1刷印刷

2017年4月25日 初版第1刷発行

著 者 福 島 次 郎

発行人 森 下 紀 夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一＋田中奈緒子

企画・編集／宮下和夫

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1580-0 ©2017 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。